

イースターおめでとうございます。と言いましても、素直に喜ぶことができないなかでのあいさつになります。今、このような状況におきまして、復活を告げる祝祭の時ではあるのですが、感染症の対策のために、今日、礼拝堂に居るはずの皆さんの顔を直接うかがうことができずに複雑な心境で、この日を迎えています。

だれもが等しく理解していることですが、この感染症は、ひととひとが顔と顔を合わせて交わり生活を創りあげているという日常の営みを介して広がっています。わたしたちが朝起きて、家族、友人、学校、仕事を創りあげているという日常の営みを介して広がっていきますから、これを抑えるために、その日常、わたしたちが朝起きて、家族、友人、学校、仕事を創りあげているといふなんていふ活動を、最小の範囲にとどめる、すなわち食べて、寝る、仕事などの最低のレベルにとどめなければなりません。

感染症に関連するニュースによれば、昨日（4月9日）銀座のホステスさんや歌舞伎町のホストたちが政府に緊急経済対策に飲食接待業を除外しないでほしいと申し入れました。このニュースは、いかなる職業であろうともそこに従事しているひとたちが、税金の投入を求めるとの意味は、まず当事者たちが納税者であり、その職業によって自らの命を成り立たせている、そして飲食接待業という職業が社会を構成している必要な営みであり、尊厳をもつていることをひろく社会が認めるかどうかという問題を提起することになります。他方、ドイツでは300万人のアーティストたちに補償として500億ユーロ

口を用意したといいます。文化相は「アーティストたちは生命の維持に必要だ」という理念がそこにあるというのです。

それでは教会の営みについてはどうでしょうか？会堂の礼拝を続けている教会もあり、中止した教会もあります。わたしたち生田教会では、個人、家庭での自主的な礼拝に委ね、会堂での礼拝についてはとりやめました。会堂における礼拝は、生きしていくために最低限必要な営みではないということを、自ら宣言したわけです。

個々人のレベルではさまざまな理解があるでしょう、しかし、教会としての共なる営み礼拝を控えてでも、肉体の命（現実）を先んずるべしだと不承不承、予見的かつ危機回避的に苦悶しながらではありますが、認めしたことになるはないでしょうか。この問題が信仰する者であるわたしたちが負っている抑うつ感、その核心に、居座っているだと思うのであります。はたして個人の肉体の命が、共なる礼拝に先んずるのでしょうか？

▼泣きながら復活の主に出会う

しかし、このように素直に喜ぶことができないような状況のもと複雑な思いでイースターを迎えることは、ふさわしくないとも、あながち言い切れないのです。なぜなら、復活なさったイエスに出会うマリアをはじめ弟子たちは、だれひとりとして復活を期待しつつ喜びに満ちあふれて、イエスに出会ったのではないからです。

マリアをはじめ弟子たちは、十字架につけられ死なれたイエスの肉体の命、その存在こそがすべてであつたという理解のゆえに嘆き悲しんでいるのです。

マリアなどは、——今日お読みした聖書箇所によれば、——泣きながら、天の使いたち、そしてイエスに会ったので、「女よ、（一般名詞）」と呼びかけられました。続けて「なぜ泣いているのか。だれを捜したりやめました。会堂における礼拝は、生きていくために最低限必要な営みではないということを、自ら宣言したわけです。

彼女はしがみつくようないで、せめて亡骸、死した肉体の命の近くに身を寄せたい思いだけで、復活などおよそ思いも及ばないことなのです。かつてイエス自身から復活すると言っていたにもかかわらずです。そんな不信仰なマリアに、真っ先にイエスは現れたのです。

わたしたちも常日頃「三日目に死人の内よりよみがえり」と信条を唱え、決して肉体の命だけがすべてではないと言いながら、会堂の礼拝を中止し、なんとも言葉に表しがたい矛盾葛藤の内におかれています。重ねていいますが、肉体の命に執着し、嘆き、悲しみ、涙を流す以外に何もできないようないがいるならば、わたしたちをはじめそういう人たちは、皆、イースターを迎えるにふさわしい者とし

て招かれているのです。

▼パラダイムシフトの契機・出会い

すでに復活のイエスに出会っているのに園丁ではなかと勘違い、誤認している、あなたは、わたし（イエス）を「みる」ことができるのか、認識できるのか？、と。肉体の命に執着しているかぎり、マ

リアにとってイエスは、決して救い主ではなく園丁なのです。言葉をひるがえせば園丁として目の前で語りかける人は、靈の命において見るならばキリストなのです。

そこでイエスは「マリア」と呼びかけられました。もはや「女よ」ではない、他にもいる女のうちのだれかではなく、「マリア」と、彼女ひとりを名指して呼びかけたのです。ここでマリアは気がつきました。復活のイエスとの出会いは、ひとりの女ではなくマリアというひとりとして起こった出来事なのです。

わたしたち生田教会は、会堂での礼拝をしばらくの間とりやめています。それは残念なことに違いありません。しかしまリアに一对一で出会ったイエスは、やはり「生田教会の皆さん」と呼びかけて、わたくしたちを集団として出会う以上に、ひとりひとりに出会うことでしょう。

つづけて「すがりつくのはよしなさい…」（イエスの）肉体の命に執着するのはよしなさい、と言われ

ました。肉体の命にのみすがりついて意味を見いだそうとするならば、（健康、不老長寿の祈願、繁栄に基軸をおくなば）イエスの十字架の死と決して起らないかと勘違い、誤認している、あなたは、わたし（イエス）を「みる」ことができるのか、認識でき何を意味するのでしょうか？

肉体をもって生きているわたしたちにとって、肉体の死が絶望であり、肉体の命の存在が希望であります。しかし、十字架の死は、肉体の命が絶望したところから、はじめられる信仰の内的なたたかいです。そこで起こりえないと思われる復活を信じることは、次のように言い換えてよいでしょう。

復活を信じることは、億に一の確率で賭けるようなことであるかもしれません。歴史をとおして過去に証言されたその信仰の内実は、靈の命が希望の根拠であります、

だから肉体の命がこうむる危機、たとえそれが肉体の命の死であろうとも、起こりうるすべての悲劇、悲嘆、艱難…、今わたしたちが、肉体の命において直面している現実の苦難に、何ものにも代えがたい意味を刻む、そんな道に、一步を踏み進める決断とはならないでしょう。

は一対一で出会われるのです。そんなひとりひとりが、来たるべき会堂の礼拝が再開する時に、復活のイエスに出会った喜びの経験をもとに集ったあかつてには、どんなにか素晴らしい賛美がなされることでしょう。

▼祈り

主イエスの十字架の死と復活においてご自身をわたくしたちに顕わしてください神よ。今わたしたちが献げる祈りを聞きいれてください。

世界中を席巻しているコロナウィルスの脅威に直面しているわたしたちは、常日頃負っているひとりの重荷をとおして示された務めに加えて、先に行きに不安とおののきを覚えています。また感染症により命を召された方々と近しい方々の悲嘆を覚えて、祈ります。医療に従事する方々の力を増し加えてください。だれも皆肉体の命に健康を願い求め、災いの恐れがない平安を求めています。

ただこの日、主イエスの十字架の死と復活を通してわたしたちに示された使信は、靈の命に基軸を置いて、肉体の命の危機を克服する道でした。主よ、どうか、わたしたちの恐れおののきのただ中に復活の主を信じる信仰を与えてください。

そこからわたしたちが信仰の歩みを進めて、肉体の命のたたかいに、かけがえのない意味を刻むことがかないますよう、助け導いてください。来たるべき再開の日に喜びに満たされてあなたを賛美することができますように、主イエス・キリストのみ名によつて祈ります。

▼結語

今、家庭の中でひとりで、とりわけ悲嘆のうちに祈りを獻げている人があれば、その人に、復活の主